

I Samuel 15:22-35, 16:1-23

(Iサムエル記15:22-23)「するとサムエルは言った。『主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが【主】のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。』」

これは、聖書の中の本当にすばらしい箇所のひとつです。サウルが神さまに反抗し、従順でなかったせいで、神さまはサウルを王として拒否されます。これは、神さまの子どもであると主張する私たちすべてにとって、重要なメッセージです。

今日、主イエス・キリストに対する、うちとけた親しげなアプローチがかなり多くあります。とてもたくさんの小さな歌が、次のように歌います。「イエスさまはボクの友だちだ。」私たちは、このような主に対するアプローチをどのように使うかに十分気をつける必要があります。あなたは、イエスさまはボクの友だち、と言うとき、それはどういう意味で言っていますか？実際、主を自分のレベルまで引き下げようとしているのです。もし私が、アメリカ合衆国の大統領は私の友だち、と言ったなら、私は彼を私のレベルに引き下げていることになります。でも、大統領が、ヴァーノン・マギーは自分の友だちである、と発表したとしましょう。それは、私を彼のレベルに引き上げることになるのです。私たちがイエスさまのことを「ボクの友だち」として話し始めるとき、私たちは聖書的ではありません。主は言われました。

(ヨハネ15:14)「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。」

あなたは主に従順ですか？もし私たちが主に従っていないのなら、どうして私たちは主を友と呼ぶことができるでしょう？主に従わないことは、魔法よりも悪いことです。神さまに対する反抗です。主に全く従わない人に会ったとき、その人はまったく主に属していないと結論せざるをえないでしょう。さて、私は、何かの行為が救いにかかわりがあると言っているのではありません。私が言っているのは、もしあなたが神さまの子どもであるなら、つまりあなたが主を知っているというのなら、主に従うはずだ、ということです。主はこのようにも言われました。

(ヨハネ14:15)「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」

もし主に、「私はあなたを愛していません」と言うなら、主は「わたしの戒めなど気にするな」と言われることでしょう。大切なことは、主イエス・キリストと正しい関係を持つことです。神さまの子どもとなることは、神さまを個人的に知ることです。このことが、世界中のほかの宗教とキリスト教が違うところなのです。ブッダを知らなくても、仏教徒になることができます。孔子を知らなくても、孔子の弟子になることができます。他のどの宗教でも、教祖を知らなくてもそのメンバーになることはできるのです。でも、主イエス・キリストを知らなくてはクリスチャンになることはできません。そして主を知ることは、永遠のいのちです。

(Iサムエル記15:24)「サウルはサムエルに言った。『私は罪を犯しました。私は【主】の命令と、あなたのことばにそむいたからです。私は民を恐れて、彼らの声に従ったのです。』」

この男の低次元の動機を見てください。彼は民を恐れて彼らの声に従ったと言いました。彼はすべての人を喜ばせたかったのです。多くの人たちがサウルと同じです。多くの説教者がすべての人を喜ばせようとします。私は妥協し始めた有名な牧師について最近耳にしました。彼は、すべての人と上手くやって行きたいからそうしているのだと言います。サウルのアプローチはそれでした。確かに自分の罪を告白はしましたが、彼の後悔は純粹ではありません。

(Iサムエル記15:25-29)「『どうか今、私の罪を赦し、私といっしょに帰ってください。私は【主】を礼拝いたします。』すると、サムエルはサウルに言った。『私はあなたといっしょに帰りません。あなたが【主】のことばを退けたので、【主】もあなたをイスラエルの王位から退けたからです。』サムエルが引き返して行こうとしたとき、サウルはサムエルの上着のすそをつかんだので、それが裂けた。サムエルは彼に言った。『【主】は、

きょう、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれたあなたの友に与えられました。実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔いることもない。この方は人間ではないので、悔いることがない。』」

神さまがサウルを王とされました。そして今、王国を彼から取り上げられます。彼の罪のためです。まるで、神さまが心を変えたかのように見えますが、現実には神さまは全く心を変えてはおられません。変わったのは神さまではありません。サウルなのです。サウルは罪を犯しました。ですから神さまはそれにふさわしく彼を取り扱われなければなりません。

(1サムエル記15:30)「サウルは言った。『私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。どうか私といっしょに帰って、あなたの神、【主】を礼拝させてください。』」

私は、サウルの改心が純粋なものであるとは思いません。彼が自分の罪をどのように覆い隠しているか、見てください。彼はサムエルに言います。

「型どおりの礼拝と一緒にやって、私が拒否されたと言うことを民に悟られないようにしようじゃありませんか。」

彼は悔い改めはしなかったのですが、自分の不従順の罰則を支払いたくはありませんでした。彼は最後まで偽善者でした。

(1サムエル記15:32-33)「その後、サムエルは言った。『アマレク人の王アガグを私のところに連れて来なさい。』アガグはいいややながら彼のもとに行き、『ああ、死の苦しみは去ろう』と言った。サムエルは言った。『あなたの剣が、女たちから子を奪ったように、女たちのうちであなたの母は、子を奪われる。』こうしてサムエルは、ギルガルの【主】の前で、アガグをずたずたに切った。」

アガグはサムエルのところに「いややながら」やって来ました。なぜなら、自分が面倒なことになっていることが分かっていたからです。そしてサムエルはアガグを殺しました。さて、これは今日、一部の人たちには強い薬かも知れませんが、私たちの神さまはさばきの神さまです。神さまは不正と悪とをさばかれるのです。私は神さまがさばかれることを嬉しく思います。あなたはどう思っているかわかりませんが、今日悪を行って、のがれることのできる人はだれもいないことを私は神さまに感謝します。自分たちは罪と、不正直と、殺人と、姦淫とをのがれていると思っている人たちが、地位の高い人たちの中にさえもいるかもしれませんが、でも、彼らはのがれることはありません。神さまがこれから彼らをさばかれるのです。罪をのがれることのできる人は誰ひとりとしていません。今日、そのことをとてもはっきりさせる必要があります。そこでサムエルは、この不道徳で邪悪な支配者、アガグに神さまのさばきをくだしたのです。

(1サムエル記15:34-35)「サムエルはラマへ行き、サウルはサウルのギブアにある自分の家へ上って行った。サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。しかしサムエルはサウルのことで悲しんだ。【主】もサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた。」

聖書に神さまが悔やまれたと書かれているとき、それは、神さまの行動がまるでご自分の考えを変えられたように見える、ということを意味します。神さまは考えを変えてはおられません。最初から、もしサウルが成功しなかったら、神さまは彼を退けると言われたのです。サウルは罪を犯しました。ですから、神さまは彼を王という地位から取り除かれました。神さまは今も罪を憎み、罪をさばかれます。サウルは民の選択でしたが、彼は失敗しました。それでもサムエルは彼のために悲しみました。私は、サムエルがダビデよりもずっとサウルを愛していたと思います。サムエルは彼が失敗して脇へどけられるのを見たくありませんでした。だからこそ、サウルへの彼のことはとても強く、厳しいのです。強く厳しいことは、彼を愛している人物の口から出てきたのです。サムエルのことはまた、神さまの心から出ていました。

神さまの愛は、神さまが罪人をさばくことを妨げることはありません。神さまは罪人たちを愛しておられるのと同時に、彼らにさばきをもたらすことができになります。私たちの神さまは、愛される方であるのと同時に、聖なる方、義なる方なのです。

テーマ:ダビデ、油を注がれる。

神さまはダビデをサウルに継ぐ王として選び、彼に王として油をそそぐために、サムエルをベツレヘムに送られます。サウルが神さまに見捨てられたので、サウルの悪霊を静めるために立琴を弾くように、ダビデが宮廷に召し出されます。

16章には新しい主題が書かれています。私たちは、サウルと対照的にダビデを見ることになります。ダビデは神の人であり、サウルはサタンの人です。15章では、神さまがサウルを拒否されるのを見ました。神さまは、彼がご自分に従うかどうかを見るために、一度ならず何度もサウルにチャンスをお与えになりました。サウルは、自分が神さまに全く不従順であることを明らかにしました。彼は成功するべきでしたが、しませんでした。主はサウルの王としての器量の結果を見るのに待たれる必要はありませんでした。主はすでに知っておられました。でも、サウル自身が知る必要があったのです。サムエルはサウルを愛していましたから、彼も知る必要がありました。民がサウルを選んだのですから、民も知る必要がありました。

今日、私たちが純粋な神さまの子どもであるかどうかをあなたも私も知る必要があります。この理由で、私たちは試されるのです。私たちには神さまの御霊の助けが必要です。なぜなら、ヘブル人への手紙に次のように書かれているからです。

(ヘブル12:6)「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

主はご自分が愛しておられる者たちを試されます。それはサウルの時代の神さまのやりかたでしたし、今日も神さまのやり方です。

(ヤコブ1:12)「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」

もう一度、なぜアマレク人とアガグを殺害するという極端な手術が行われたのでしょうか？アマレクはエサウの息子でした。アマレク人たちは、イスラエルの子らが約束の地に入ろうとしているときに、彼らと戦いました。神さまは何世代にも渡ってアマレクと戦って、ついには彼らをさばくと言われました。アマレク人には、自分たちの道を変えるために500年が与えられていました。彼らが確かに神さまに背を向けたので、神さまは彼らをさばかれました。

さて今、王としてサウルのあとを継ぐために、神さまがダビデを選ばれる場面にやって来ました。ダビデに王として油をそそぐために、神さまはサムエルをベツレヘムに遣わされます。ダビデは神さまの選択でした。神さまは、ダビデのことで苦労されましたが、神さまは私たち全員のことで苦労されていると思いませんか？

(1サムエル記16:1)「【主】はサムエルに仰せられた。『いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。』」

確かにサムエルはサウルの味方でした。サムエルは彼を愛しており、神さまが彼を退けられるのを見るのはいやでした。サウルに、彼が拒否され、王位から退けられたと言う最後通牒を渡すのは、サムエルにはつらいことでした。サムエルの悲しみが、すべてをもっと印象深くします。

(1サムエル記16:2-3)「サムエルは言った。『私はどうして行けましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。』【主】は仰せられた。『あなたは群れのうちから一頭の雌の子牛を取り、【主】にいけにえをささげに行く』と言え。いけにえをささげるときに、エッサイを招け。あなたのなすべきことを、このわたしが教えよう。あなたはわたしのために、わたしが言う人に油をそそげ。』」

サムエルはエッサイのところに行くことを恐れました。なぜなら、サウルは対抗する気分になれないからです。サムエルは必死です。でも、この物語に入ると、選択をされるのは神さまであるということが分かります。神

さまはサムエルに何をすべきかをはっきり語られますが、前もっての情報は何もお与えにはなりません。彼が何も知らないことが彼を守るのです。そうしてサムエルは、ベツレヘムのエッサイの家へ行きます。彼はエッサイと息子たちを、いけにえをささげるときに招きます。

(Iサムエル記16:6-7)「彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、『確かに、【主】の前で油をそそがれる者だ』と思った。しかし【主】はサムエルに仰せられた。『彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。』」
この箇所全体を通して、最高の霊的な原則が私たちに与えられています。15章でサムエルはサウルに言いました。

(Iサムエル記15:22)「…『…聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。』」

私たちは、主への愛を通して、自分たちが主イエス・キリストの子どもであるかどうかを示します。私たちが証しの中で何を言うかではありません。私たちが主に従っているかどうかが問題なのです。クリスチャンとしての生活は、現実です。「見せ掛け」やまねごとの生活ではありません。

神さまが私たちを見られるとき、神さまは私たちを内側から見られます。神さまはインテリア・デコレーター(interior decorator : 内側を装飾する方)なのです。神さまはいつでも内側をチェックされます。

サムエルはこの、体格の良いハンサムな若者を見て、この人が次のイスラエルの王になる、神さまの選択に違いない、と感じます。でも、神さまはサムエルに言われます。「彼の外見を見ないで欲しい。見た目で人を判断してはいけない。今回はわたしに選ばせなさい。わたしが王を選ぶ。」神さまは心を見られます。そのことを神さまに感謝しましょう。私たちはたとえクリスチャンであっても、あまりにも人を外見や、ふところ具合や、ステータス・シンボルで判断しやすい者です。彼らが乗っているキャデラックとか、住んでいる家とか、彼らの地位とかで判断してしまうのです。神さまはそのような基準で判断されることは絶対にありません。神さまはサムエルに、外見に注目しないように、と言っておられます。神さまは心を見られるのです。

そこで、エッサイは息子たちひとりひとりにサムエルの前を通らせました。サムエルはエッサイに、どうして自分が来たかをはっきり語り、エッサイは7人の息子たちにサムエルの前を通らせたのです。

(Iサムエル記16:10-11)「こうしてエッサイは七人の息子をサムエルの前に進ませたが、サムエルはエッサイに言った。『【主】はこの者たちを選んではおられない。』サムエルはエッサイに言った。『子どもたちはこれで全部ですか。』エッサイは答えた。『まだ末の子が残っています。あれは今、羊の番をしています。』サムエルはエッサイに言った。『人をやって、その子を連れて来なさい。その子がここに来るまで、私たちは座に着かないから。』」

確かにダビデの父親さえも、7人の兄たちではなくダビデを選ぶようなことはしなかったことでしょう。なによりもまず、ダビデはまだ少年でした。彼は16歳か、もっと若かったのではないかと考えられています。彼は羊飼いでした。羊と一緒に外にいたのです。彼はそんなに物を知りませんでした。エッサイは確かに王として、彼を兄弟たちの上に選ぶことはなかったでしょう。事実、エッサイは彼を全く無視していました。エッサイはほかの息子たちのうちのひとりだと確信していたので、いけにえをささげるときにダビデを招きもしませんでした。サムエルが、ダビデが外で羊を飼っていることを知ったとき、彼は実質上次のように言いました。「これは大切なことなのです。私の務めを果たすまでは、座って食べるようなことはしませんから。」

(Iサムエル記15:12)「エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。【主】は仰せられた。『さあ、この者に油をそそげ。この者がそれだ。』」

この節で、ダビデが「赤かった(ruddy)」(訳注: 日本語では血色の良い顔と訳されていますが、赤い／赤らんだという意味もあります)と書かれているのは、彼が赤毛だったということです。そして彼は自分の赤毛に合った性格をしていました。彼は短気(hot temper)でした。(訳注: 赤毛の人は短気で、熱くなり易い、とい

う固定観念があるようです。)でも、彼が赤毛だったという事実にくわえて、彼は姿も立派でした。彼は「美しい目」をしていました。神さまは、美しいものをさげすまれることはありません。神さまは、美しさを用いることがおできになります。美しさを造られた方なのですから。この地球に住んでいる人はだれも、それぞれの州や国の多くの風光明媚な場所の美しさを無視することはできません。そして、夕焼けはどこの場所にいても壮観です。神さまの専攻は、美しさです。

私は、ノン・クリスチヤンの世界がすべての価値あるものや美しいものを独り占めにしているのをけしからぬことだと思います。今日、なぜ美しさと才能が神さまにささげられないのでしょうか？

ダビデはハンサムな若者でしたが、神さまはその理由で彼を選ばれたわけではありません。神さまは、彼の心をご存知でした。ダビデは神さまの選択でした。神さまは、ダビデについてあなたや私の知らないことを知っておられます。ダビデは失敗をしましたが、その下には、失敗することのない信仰がありました。ダビデは神さまを愛し、信頼していました。神さまとともに歩みたいと願っていました。神さまはダビデをまき小屋に連れて行き、彼のいのちのぎりぎりまで罰せられましたが、ダビデは一度も泣き言を言ったり、声を出して叫んだりしませんでした。(訳注:バテ・シェバ事件のあとに、神さまが息子を取られたことをいっているのでしょうか?)彼は神さまとの交わりを求めていました。神さまはダビデを愛されました。彼は、神さまのみこころにかなった人物でした。

(1サムエル記16:13)「サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油をそそいだ。【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。」

サムエルは油をそそいでダビデを王としました。そして主の霊が彼の上に下りました。このとき、主の霊はサウルを離れました。

(1サムエル記16:14-16)「【主】の霊はサウルを離れ、【主】からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。そこでサウルの家来たちは彼に言った。『ご覧ください。わざわいをもたらす、神の霊があなたをおびえさせているのです。わが君。どうか御前にはべるこの家来どもに命じて、じょうずに立琴をひく者を捜させてください。わざわいをもたらす、神の霊があなたに臨むとき、その者が琴をひけば、あなたは良くなられるでしょう。』」

サウルは完全にサタンにのっとられたのだと私は信じています。彼の家来たちは、サウルがこの精神的な慢性病、霊的な病をもっていることに気づきました。音楽には、どう猛な獣をも静かにさせる力があると言えます。サウルの家来たちは、最高のミュージシャンを捜すために、コンテストをすることを提案しました。ダビデはミュージシャンでした。

(1サムエル記16:17-23)「そこでサウルは家来たちに言った。『どうか、私のためにじょうずなひき手を見つけて、私のところに連れて来てくれ。』すると、若者のひとりが答えて言った。『おります。私はベツレヘム人エッサイの息子を見たことがあります。琴がじょうずで勇士であり、戦士です。ことばには分別があり、体格も良い人です。【主】がこの人とともにおられます。』そこでサウルは使いをエッサイのところに遣わし、『羊の番をしているあなたの子ダビデを私のところによこしてください』と言わせた。それでエッサイは、ろば一頭分のパンと、ぶどう酒の皮袋一つ、子やぎ一匹を取り、息子ダビデに託して、これをサウルに送った。ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルは彼を非常に愛し、ダビデはサウルの道具持ちとなった。サウルはエッサイのところに人をやり、『どうか、ダビデを私に仕えさせてください。私の気に入ったから』と言わせた。神の霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴を手にとって、ひき、サウルは元気を回復して、良くなり、わざわいの霊は彼から離れた。」

ダビデは、いろんなことで並外れた人物でした。ダビデは宮廷に連れて来られます。神さまは、ご自分がだれかを特別な役職や務めに選ばれるとき、その人の内側を見られます。サウルは今、神さまに見捨てられ、ダビデが立琴を弾くために宮廷に連れて来られます。今はまだ知られてはいませんが、イスラエルに新しい王が与えられたのです。